

トーマス・マン文献目録(その二)

Verzeichnis der Literaturen und Übersetzungen Thomas

Manns in Japan — 2 —

村 田 經 和

(Tsunekazu Murata)

邦訳書目録への補

A(3)に

『幻滅』○佐藤晃一訳 井上正蔵編「ドイツ短篇名作集」の内 216～224頁 学生社 昭和36年

A(26)に

『ヴェニスに死す』抄訳 ○渡辺格司訳「独逸語学雑誌」32巻1号～33巻1号 日独書院 昭和5年1月～6年

1月

同抄訳○齊藤省三訳「エルンテ」第8輯 昭和7年2月

トーマス・マン文献目録(村田)

A(44)に

『ある詐欺師の回想 フェリクス・クルルの告白』○高橋義孝・森川俊夫・円子修平訳 330頁 東京・新潮社
昭和36年

B(8)に

『ゲーテとトルストイ』○佐藤明訳「ゲーテの思想」の内 71~155頁 東京・立命館 昭和7年

B(20)に

『トーマス・マン自伝』○浜野修訳「浪漫古典」第1巻第8号 99~103頁 昭和書房 昭和9年11月

B(24)に

『作家としてのゲーテの生涯』○佐藤晃一訳 筑摩書房版世界文学大系「ゲーテ」(2)の内 572~580頁 昭和33年

B(46)に

『永遠なるゲーテ』○佐藤晃一訳 人文書院版「ゲーテ全集」第12巻の内 1~44頁 昭和36年

B(48) 成瀬無極訳『ゲーテとデモクラシー』に、昭和25年5月 を加える
B補に

『ゲーテ百年祭に際して日本青年に与う』○中島勝訳 日独文化協会編「ゲーテ研究」の内 1~20頁 岩波書店 昭和14年

『戦後日本の知識人へ——「近代文学」に答ふ』昭和23年4月トーマス・マン宛公開状に対する平田次三郎氏宛

B(54)に

返信]○平田次三郎訳「近代文学」4巻3号 11~17頁 昭和24年3月

『チエーホフ論』○木村彰一訳 筑摩版世界文学大系「チエーホフ」の内456~470頁 昭和33年

二 研究文献

ここには日本に於いて印刷発表された邦文および欧文の研究文献を収めるが、翻訳あとがき、解説のうちごく短い物、書評、論文要旨、辞典文学史の記載事項などは割愛した。

A 創作品について

《トーマス・マンの短篇に就いて》

白旗信「浪漫古典」1巻8号 43~48頁 昭和9年11月

《トーマス・マン初期の短篇》

栗崎了 熊本大学法文学会「法文論叢」7号(文科篇)

《ブッデン بروック以前》

江沢健之助「藝文研究」2 87~118頁 昭和28年

《イロニーの発生——Buddenbrooks 以前》

棚橋一雄「ドイツ文学」16号 39~44頁 昭和31年

《作品の展開——春嵐》

トーマス・マン文献目録(村田)

佐藤晃一「トオマス・マン」112～115頁 世界評論社 昭和24年

《作品の展開——処女作》

佐藤晃一「トオマス・マン」111～112頁 世界評論社 昭和24年

《トーマス・マンの処女短篇小説「Gefallen」》

保坂宗重 茨城大学文学部「紀要」11号 95～116頁 昭和35年

《幻滅から》

佐藤晃一「トオマス・マン論」56～69頁 講談社 昭和23年

《Der Wille zum Glück 及 Enttäuschung》

保坂宗重 茨城大学文学部「紀要」(人文)10号 109～130頁 昭和35年

《作品の展開——小男フリイデマン氏》

佐藤晃一「トオマス・マン」115～123頁 世界評論社 昭和24年

《トーマス・マンのブッデンブローク一家について》

高橋健二「浪漫古典」第1巻第8号 32～37頁 昭和9年11月

《作品の展開——ブッデンブローク一家》

佐藤晃一「トオマス・マン」123～135頁 世界評論社 昭和24年

《「ブッデンブローク一家」解説》

成瀬無極「ブッデンブローク一家」3巻(思索選書) 297～312頁 昭和24年

《トオマス・マンとその作品——特に「ブッデンブローク一家」に就いて》

成瀬無極「ブッデンブローク一家」(1)(岩波文庫) 227頁 昭和26年(思索選書所収のものと同別内容)

《ハノオ・ブッデンブロークの死の一考察》

大谷重彦 富山大学文理学部「文学紀要」10号 93～101頁 昭和35年

《トーマス・マンの芸術と生——ブッデンブロークを中心に》

後藤健次 徳島大学「学芸紀要」第10巻 40～54頁 昭和35年

《トーマス・マンの「ブッデンブロークス」》

笹谷雅 東北大教養学部「文科紀要」5集 102～112頁 昭和35年

《トーマス・マンの「トリスタン」》

和田洋一「カスタニエン」第10冊 昭和10年

《作品の展開——トニオ・クレゲル》

佐藤晃一「トオマス・マン」135～158頁 世界評論社 昭和24年

《小説に描かれた青春像》

高橋義孝「文芸」第11巻第1号 78～79頁 河出書房 昭和29年

《トニオ・クレイガー覚書》

中島悠爾「未定」等2号 21～27頁 昭和30年

《作品の展開——フィオレンツァ》

トーマス・マン文献目録(村田)

トーマス・マン文献目録(村田)

三四八

佐藤晃一「トオマス・マン」158～163頁 世界評論社 昭和24年

《トーマス・マンの戯曲「フィオレンツァ」(1)——Quasi-Drama》

大谷重彦 富山大学文理学部「文学紀要」10号 59～70頁 昭和35年

《トーマス・マン「ヴェルズンゲンの血」》

吉田次郎「カスタニエン」改巻第3号 昭和12年

《トーマス・マン初期作品に於ける一面——「転落」および「ヴェルズンゲンの血」について》

村田経和 東京都立大学独文研究会「ドイツ語ドイツ文学」2 11～18頁 昭和34年

《ある芸術家の死——「ヴェニスに死す」の問題》

平田次三郎「思潮」昭和23年11月号 34～39頁

《作品の展開——ヴェニスに死す》

佐藤晃一「トオマス・マン」179～182頁 世界評論社 昭和24年

《「ヴェニスの死」の一側面》

橋好一「金沢大学法文学部論集」文学篇3 74～89頁 昭和30年

《ある古典的な短篇》

松浦憲作「ドイツ文学」20号 50～56頁 昭和34年

《一芸術家の少年愛》

内海晶 東京都立大学独文研究会「ドイツ語ドイツ文学」2 18～24頁 昭和34年

《ヴェニスに死す》の神話の要素》

山本篤司「ドイツ文学」24号 21～28頁 昭和35年

《トーマス・マンの「ヴェニスに死す」について》

栗崎了 熊本大学法文学会「法文論叢」13号 文科篇 18～33頁 昭和36年

《「太公殿下」あとがき》

竹田敏行「トーマス・マン全集」第8巻 269～273頁 三笠書房 昭和15年

《作品の展開——太公殿下》

佐藤晃一「トーマス・マン」163～171頁 世界評論社 昭和24年

《トオマス・マン、とくに作品「薔薇よ香りあらば」について》

川崎芳隆「薔薇よ香りあらば」上巻 329～352頁 東京リスナー社 昭和24年

《「太公殿下」解説》

野島正城 河出版世界文学全集17 22～27頁 昭和29年

《「魔法の山」覚え書——トーマス・マンの文章について》

大山定一「浪漫古典」1巻8号 38～48頁 昭和9年11月

《トーマス・マンの「魔法の山」》

大畑末吉「独乙文学研究」第7巻 51～98頁 昭和11年

《「暗夜行路」とZauberberg》

トーマス・マン文献目録(村田)

大畑末吉「独乙文学」第2年第1輯 105～115頁 昭和13年

《トーマス・マンの魔の山》

山岸光宣「読書と人生」昭和14年2月号 三笠書房

《魔の山》

伊藤整「読書と人生」昭和14年2月号 三笠書房

《魔の山》

佐藤晃一「読書と人生」昭和14年2月号 三笠書房

《「魔の山」解説》

関泰祐・望月市恵「魔の山」(1)(岩波文庫)3～8頁 昭和14年

《愛と死の冒険家》

平田次三郎「世界文学」昭和21年11・12合併号

《ハンス・カストルプ像》

平田次三郎「世界小説」1巻7号 8～12頁 昭和23年

《作品の展開——魔の山》

佐藤晃一「トオマス・マン」200～225頁 世界評論社 昭和24年

《「魔の山」と死の思想》

高安国世「トーマス・マンとリルケ」101～162頁 アテネ書院 昭和24年

《魔の山》——マンの死の思想に關聯して》

高安国世「魔の山その他」144～200頁 明窗書房 昭和24年〔昭和12年の作、同じものが「若き日のために」(七丈書院、昭和19年)および「物への信頼と意志」(明窗書房 昭和22年)に所収〕

《魔の山》

佐藤晃一 筑摩書房「文学講座VI」 昭和26年

《「魔の山」への一考案》

高橋義孝「エルンテ」第8巻第2号 22～35頁 昭和11年

《魔の山》

吹田順助「新しい学校」4巻10号 86～88頁 昭和27年

《「魔の山」解説》

望月市恵 河出版「世界文学全集」16 1～7頁 昭和29年

《教養小説の新しい型——トーマス・マンの「魔の山」》

東京「朝日新聞」昭和30年8月22日

《「魔の山」解題》

佐藤晃一 三笠版「現代世界文学全集」22 1～14頁 昭和30年

《Thomas Mannの發展における「魔の山」の意義について》

有福博「岐阜大学文学部紀要」4 昭和31年

《「魔の山」に現われた時間相——その背景と意義》

棚橋一雄「岡山大学法文学部学術紀要」8 昭和31年

《「魔の山」雑記》

秋山英夫 三笠版現代世界文学全集月報31 2～3頁 昭和32年

《トーマス・マンの「魔の山」について》

橘好一「金沢大学法文学部論集」文学篇第5巻 88～118頁 昭和33年

《「魔の山」論(1)》

加藤真二「綜合世界文芸」13輯 97～110頁 昭和33年

《「魔の山」の構成について》

栗崎了「ドイツ文学」20号 56～61頁 昭和34年

《「魔の山」論(2)》

加藤真二「綜合世界文芸」17輯 27～50頁

《ドクター・ベールレンス醉歌》

早崎守俊「架橋」4号 38～41頁 昭和35年

《「魔の山」における生活形式》

松田智雄 筑摩版「世界文学大系」月報21 2～4頁 昭和36年

《「魔の山」のおもい出》

登張正実 筑摩版「世界文学大系」月報21 4～5頁 昭和36年

《「魔の山」について》

ヴァイガント(佐藤晃一・円子修平訳) 筑摩版世界文学大系「魔の山」532～538頁 昭和36年

《「魔の山」解説》

佐藤晃一 筑摩版世界文学大系「魔の山」539～541頁 昭和36年

《作品の展開——主人と犬》

佐藤晃一「トオマス・ヤン」190～194頁 世界評論社 昭和24年

《作品の展開——無秩序と幼い悩み》

佐藤晃一「トオマス・ヤン」226～227頁 世界評論社 昭和24年

《「マリオと魔術師」について——多少ゼミナール風なその分析》

高橋義孝「思潮」昭和23年11月号 40～41頁

《作品の展開——マリオと魔術師》

佐藤晃一「トオマス・ヤン」228～229頁 世界評論社 昭和24年

《「マリオと魔術師」覚書》

空井義観「愛媛大学紀要」第1部人文科学2巻2号 昭和30年

《「マリオと魔術師」について》

高橋義孝 創元社「芸術文学論集」138～157頁 昭和33年

トーマス・マン文献目録(村田)

《「ヤコブ物語」紹介》

星野慎一「独乙文学研究」第5号 307～309頁 昭和6年

《トーマス・マンの新作品——ヤコブの物語について》

野島正城「エルンテ」第6巻第2号 59～61頁 昭和9年「灯台、其の日其の日」の一部

《トーマス・マンの近作「ヨゼフとその兄弟」》

石川敬三「カスタニエン」第8号 昭和9年

《ヨゼフとその兄弟たち——ヤコブの物語》

佐藤晃一「エルンテ」第7巻第1号 89～100頁 昭和10年

《「青年ヨゼフ」を読む》

満足卓「エルンテ」第7巻第1号 101～116頁 昭和10年

《「ヤアコブ物語」あとがき

佐藤晃一・麻生種衛 三笠版トオマス・マン全集12 263～265頁 昭和16年

《「ヨゼフ物語」の意義》

ハンス・ウォルハルト「思潮」昭和23年11月号 46～48頁

《「ヨオゼフとその兄弟たち」——「ヤアコブ物語」について》

佐藤晃一「トオマス・マン論」108～138頁 講談社 昭和23年

《作品の展開——ヨオゼフとその兄弟たち》

佐藤晃一「トオマス・マン」229～248頁 世界評論社 昭和24年

《ヨゼフ物語》の理解のために

大野敏英「ドイツ文学」4号 32～34頁 昭和25年

《トーマス・マンの「ヨゼフ物語」》

原田義人 中部日本新聞社「世界の文学」 昭和26年

《「ヨゼフとその兄弟達」における神話と典型について》

山中弘志「ドイツ文学」15号 72～76頁 昭和30年

《危機における神話類型》

江野専次郎 新潮版現代世界文学全集月報40 4～6頁 昭和31年

《「ヨゼフとその兄弟」解説》

高橋義孝 新潮版現代世界文学全集34 1～10頁 昭和31年

《息子の世代》

山下肇 新潮版現代世界文学全集月報40 6～7頁 昭和31年

《ヨゼフとその兄弟たち》

佐藤晃一 新潮版現代世界文学全集月報40 1～3頁 昭和31年

《「ヨゼフとその兄弟たち」における人間性について》

山中弘志 熊本大学法文学会「法文論叢」9号 文科篇 昭和32年

《イスラエル伝説の教育的意義——トーマス・マン作「ヨセフとその兄弟達」研究の試み(上)》

山戸照靖「Quelle」2 32～43頁 昭和32年

《イスラエル伝説の教育的意義——トーマス・マン作「ヨセフとその兄弟達」研究の試み(下)》

山戸照靖「Quelle」3 35～49頁 昭和33年

《神話における人間認識——トーマス・マン「ヨセフ物語」の理解のために》

杉浦忠夫「影」1号 19～33頁 昭和34年

《「恋人ロッテ」あとがき》

佐藤晃一「恋人ロッテ」(下) 390～392頁 中央公論社 昭和26年

《「ロッテ・イン・ヴァイマル」におけるゲーテ像》

西義之「ドイツ文学」11号 38～44頁 昭和28年

《「恋人ロッテ」解説》

佐藤晃一「恋人ロッテ」(上) 312～315頁 新潮文庫 昭和29年

《トーマス・マンのゲーテ観——「ヴァイマルのロッテ」を中心として》

小名木栄三郎「芸文研究」5号 93～105頁 昭和30年

《「ヴァイマルのロッテ」論》

山中弘志 熊本大学法文学会「法文論叢」12号 57～70頁 昭和35年

《「シータの死」訳者の言葉》

山西英一「シータの死」163～167頁 熊書房 昭和21年

《トーマス・マン「すげかえられた首」について》

北野富士雄 明治大学人文科学研究所紀要「人文科学研究」6号 59～70頁 昭和31年

《トーマス・マンの「すげかえられた首」の問題》

樋口忠治 九州大学「文学研究」60輯 143～150頁 昭和36年

《「十誠」訳者序》

加藤子明「十誠」1～9頁 世界の日本社 昭和23年

《「掟」について》

佐藤晃一「詐欺師フェーリクス・クルルの告白」262～267頁 新潮文庫 昭和26年

《トーマス・マン「律法」論考》

徳沢得二「文芸研究」4号

《Thomas Mann's Dr. Faustus》

高橋義孝「雄鷄通信」6巻7号 74～80頁

《トーマス・マンの「ファウスト博士」》 手塚富雄「世紀」1巻8号 28～33頁 昭和24年11月

《トーマス・マンの「ドクトル・ファウストゥス」》

高橋義孝「人間」昭和25年10月

《トーマス・マンの「ファウスト博士」》

トーマス・マン文獻目録(村田)

成瀬無極「心」昭和25年4月

《ファウスト博士》

佐藤晃一「ドイツ語」3巻4号 34~37頁 昭和26年4月

《ファウスト博士(下)》

佐藤晃一「ドイツ語」3巻5号 32~35頁 昭和26年5月

《トーマス・マンのファウスト小説》

臼井竹次郎 京都大学分校独乙語研究室「報告」1号 36~38頁 昭和27年

《トーマス・マンの「ドクトル・ファウスト」序論》

保坂宗重 鳥取大学文学部「研究報告」4 136~146頁

《ファウスト博士のバラレリズムについて》

森川俊夫「糞土」第1号 30~40頁 昭和28年

《Doctor Faustus について》

米本三爾「宮崎大学文学部研究時報」

《悪魔の一考察「トーマス・マンのファウスト博士」の場合》

岡崎初雄 富山大学文学部「文学紀要」2号 135~159頁 昭和27年

《トーマス・マン「ファウスト博士」の形式について》

城山良彦「学習院大学文学部研究年報」1輯 353~376頁 昭和28年

《「ファウスト博士」はしがき》

関泰祐・関楠生「ファウスト博士」(3) 285～293頁 岩波書店 昭和29年

《「ファウスト博士」「選ばれし人」》

吉村博次「近代文学」9巻5号 48～50頁

《現代ファウストと弁神論》

義則孝夫「ドイツ文学」12 56～59頁 昭和29年

《「ドクトル・ファウストゥス」と「救済」について》

森川俊夫「ドイツ文学」12号 37～44頁 昭和29年

《「ファウスト博士」論》

日野啓三「近代文学」10巻12号 昭和30年

《現代ファウスト》

吉田次郎「思想」382号 79～88頁 昭和31年

《「ファウスト博士」にあらわれる二三の地名についての註のこころみ》

関楠生「形成」8号 17～16頁 昭和32年

《「ドクトル・ファウスト」における悪魔》

米本三爾 宮崎大学「学芸学部紀要」4 昭和33年

《ファウスト博士への再度の註のこころみ》

関楠生「形成」11号 43～44頁 昭和33年

《トーマス・マンの „Dr. Faustus”》

笹谷雅「東北ドイツ文学研究」2号 43～51頁 昭和33年

《ドクター・ファウスト——ルカーチ「近代芸術の悲劇」にふれて》

笠松一夫「大阪府立大学紀要」6号 91～100頁 昭和33年

《ファウスト博士の小説世界》

渡辺健「形成」13号 1～10頁 昭和34年

《ドクター・ファウスト——病理的と生理的》

笠松一夫「大阪府立大学紀要」7号 147～158頁 昭和34年

《トーマス・マン「ファウスト博士」》

武田昭「東北ドイツ文学研究」4号 38～67頁 昭和35年

《マンの「ファウスト博士」——その構成要素》

土屋明人 福岡学芸大学「紀要」10号 105～117頁 昭和35年

《トーマス・マン「ファウスト博士」におけるヘートーヴェン像》

武田昭 東北大学教養学部「文科紀要」5集 113～123頁 昭和35年

《「ファウスト博士」に於ける救済の曙光》

土屋明人「ドイツ文学」24号 28～35頁 昭和35年

《ファウスト博士》

松浦憲作「ドイツ文学」27号 85～91頁 昭和36年

《トーマス・マン「ファウスト博士」(承前)》

武田昭「東北ドイツ文学研究」5号 80～71頁 昭和36年

《選ばれた人》

佐藤晃一「北国文化」昭和26年

《選ばれし人》

松浦憲作「ドイツ文学」24号 82～85頁 昭和35年

《「選ばれし人」における「物語」の問題》

滝崎安之助「近代文学」10巻12号

《茶番の振舞い》

佐藤晃一「近代文学」11巻5号

《欺かれた女》

北杜夫「文芸首都」22巻4号 74～75頁

《「詐欺師フェリックス・クルルの告白」あとがき》

佐藤晃一「詐欺師フェリックス・クルルの告白」169～174頁 地平社 昭和23年

《作品の展開——詐欺師フェリックス・クルルの告白》

トーマス・マン文献目録(村田)

佐藤晃一「トオマス・マン」172～179頁 世界評論社 昭和24年

《詐欺師フェーリックス・クルルの告白》について》

佐藤晃一「詐欺師フェーリックス・クルルの告白」256～262頁 新潮文庫 昭和26年

《トーマス・マンの小説技法——「詐欺師フェーリックス・クルルの告白」を中心として》

牧祥三「ドイツ文学」7号 29～32頁 昭和26年

《詐欺師フェーリックス・クルルの告白》

佐藤晃一「ドイツ語」9巻11号 28～31頁 昭和32年

《詐欺師的典型的の諸問題——トーマス・マンは「詐欺師フェーリックス・クルルの告白」をなぜ中断しなければならなかったか》

立川洋三 立教大学研究報告(一般教育部)5号 67～90頁 昭和33年

《トーマス・マンと「フェーリックス・クルル」》

岩子良一「大阪府立大学紀要」7巻 135～146頁 昭和34年

《トーマス・マンの「詐欺師フェーリックス・クルルの告白」について》

柳川成男 東京都立大学「人文学報」24号 115～143頁 昭和36年

《ある詐欺師の回想》解説》

高橋義考・森川俊夫・田子修平「ある詐欺師の回想」の内 323～330頁 新潮社 昭和36年

B 思想にひびく

《ゲーテの市民性》

武田忠哉「独乙文学研究」第3号 東大独文学会 昭和7年

《トオマス・マンのゲーテとトルストイから、その他》

本野享一「カスタニエン」第5冊 15～29頁 京大独乙文学研究会 昭和9年

《トオマス・マンのゲーテ観》

小口優「浪漫古典」第1巻8号 8～14頁 昭和9年11月

《トオマス・マン、ゲエテ跋》

阿部六郎「ゲエテ」の内 99～107頁 芝書店 昭和10年

《ゲエテとトオマス・マン序論》

佐藤晃一「トオマス・マン論」の内 196～221頁 講談社 昭和23年

《ゲーテとトオマス・マン》

高橋義孝「理想」192号 28～36頁 昭和24年4月

《トオマス・マンのゲーテ観》

中島健蔵「アンドレ・ジイド、生涯と作品」の内 178～186頁 筑摩書房 昭和24年

《ゲーテとトオマス・マン》

高橋義孝「理想」192号 28～36頁 昭和24年4月

《ゲーテとトオマス・マン》

トオマス・マン文献目録(村田)

佐藤晃一 小牧・手塚編「ゲーテと現代」の内 158～182頁 講談社 昭和24年

《トーマス・マンの「市民時代の代表者としてのゲーテ」》

原田義人「現代ドイツ文学論」の内 福村書店 昭和24年

《トーマス・マンのゲーテ観》

中島健蔵「アンドレ・ジイド」の内 231～234頁 表現社 昭和24年

《「ゲーテとトルストイ」あとがき》

高橋義孝 新潮文庫「ゲーテとトルストイ」の内 163～166頁 昭和26年

《トオマス・マンに於けるゲーテ像》

西義之「金沢大学法文学部論集」文学篇1 65～74頁 昭和28年

《人間の探求——特にトーマス・マンの「ゲーテとトルストイ」に就いて》

長与善郎「人間の探求」(アテネ文庫97)の内 3～8頁 弘文堂 昭和29年

《ゲーテとトーマス・マン》

高橋義孝「現代ドイツ文学」(要選書77)の内 100～114頁 昭和30年

《ゲーテとトーマス・マン 両者の顕著な相似関係》

高橋義孝「知性」2巻10号 131～139頁 河出書房 昭和30年

《ゲーテとトーマス・マン》

高橋義孝「文学と人生」(河出新書252)の内 158～165頁 昭和31年

《トーマス・マンとゲーテ》

青柳謙二 北大一般教養「外国語外国文学研究」Ⅱ 60～66頁 昭和32年
《トオマス・マンとゲーテ——ドイツ市民階級の問題として——》

西義之 立教大学研究報告(一般教養部)第2号 63～73頁 昭和32年

《トーマス・マンにおけるゲーテ像形成》

橘好一 金沢大学「法文学部論集」7 48～74頁 昭和34年

《ゲーテの影響——トーマス・マンの場合》

北野富志雄 小牧健夫博士喜寿記念論文集「ゲーテとその時代」551～563頁 郁文堂 昭和34年

《ゲーテとトーマス・マン——特にマンの「ゲーテのファウスト」について》

徳沢得二 日本ゲーテ協会「ゲーテ年鑑」2巻 36～50頁 昭和35年

《Goethe und Thomas Mann——ein kleiner Beitrag zur deutschen Literaturgeschichte》

伊東勉 岐阜大学 昭和35年

《トーマス・マンのフロイト論——1——》

高橋義孝「文学研究」41 21～34頁

《トーマス・マンのフロイト論》

高橋義孝「文学研究」昭和26年

《トーマス・マンのフロイト論》

トーマス・マン文献目録(村田)

トーマス・マン文獻目録(村田)

高橋義孝 創元社「芸術文学論集」の内 104～137頁 昭和33年

《リルケとマン》

大山定一「新潮」昭和21年3月 16～24頁

《リルケとマン》

大山定一「作家の歩みについて」の内 33～63頁 京都・甲文社 昭和21年

《知性について——トオマス・マンとリルケ》

大山定一「作家の歩みについて」の内 139～159頁 京都・甲文社 昭和21年

《トオマス・マンのニイチェ》

土井虎賀寿「座右宝」第7号 昭和22年

《トーマス・マンのニイチェ論》

城山良彦「ドイツ文学」第8号 99～93頁 昭和27年

《トーマス・マンのニイチェ体験》

秋山英夫「トーマス・マンとニイチェ」の内 5～85頁 講談社 昭和30年

《トーマス・マンのニイチェ体験》

柳川成男 東京都立大学「人文学報」13号 115～135頁 昭和31年

《シラーとトーマス・マン》

成瀬無極「新劇」22号

《トーマス・マンとワイマールのシラー祭》

中村英雄「世界文学」6号 8〜9頁 昭和30年

《トーマス・マンの「シラー論」》

野島正城「日本独文学会関東支部1955〜56会報」19〜23頁 郁文堂 昭和32年

《トーマス・マンとヘルマン・ヘッセ》

植村敏夫「浪漫古典」1巻8号 15〜20頁 昭和9年

《マンとヘッセ》

佐藤晃一「文庫」三笠書房 昭和16年

《マンとヘッセ》

佐藤晃一「トーマス・マン論」の内 49〜55頁 講談社 昭和23年

《トーマス・マンとヘッセ》

高橋健二「心」8巻5号

《Mann und Hesse》

Klaus W. Jonas「ドイツ文学」10号 15〜18頁 昭和28年

《マンとヘッセの文体》

保坂宗重「茨城大学文理学部紀要」(人文)8号 51〜67頁 昭和33年

《ヘルマン・ヘッセとトーマス・マン》

トーマス・マン文献目録(村田)

佐藤晃一 三笠版ヘッセ全集別巻「ヘルマン・ヘッセ研究」の内 148～161頁 昭和33年
《カロッサとマンと》

高橋義孝「マン・ヘッセ・カロッサ」の内 49～54頁 南北書園 昭和22年

《ハインリッヒ・マンとトーマス・マン》

秋山英夫「エレンテ」第7号 33～44頁 昭和6年

《マンとシュトルム——そのEthosを中心として》

守求敏夫 久留米大学「文理論叢」2 昭和24年

《シュトルムとトーマス・マン》

村田経和 清和書院「シュトルム選集」月報6号 1～2頁 昭和34年

《マンとシイド——世界精神に於けるその影響——》

平田次三郎「読書展望」4巻2号 6～7頁 昭和24年

《Thomas Manns Novalis-Bild im Lichte seiner Romantik-Kritik》

相良憲一「ドイツ文学」27号 92～100頁 昭和36年

《Thomas Mann の „Kleist und seine Erzählungen” の中にみられる Kleist 像——クライスト研究として——》

松沢芳郎「富山大学文理学部紀要」7号 1～10頁 昭和33年

《トーマス・マンとロシア文学》

山田広明「綜合世界文芸」19号 243～270頁 昭和35年

《トーマス・マン・コントラ・イタリア》

村田経和「イタリア学会誌」8号 42～57頁 昭和34年

(以下同様)

〔訂正〕 全回の邦訳書目録Aのうさ一七一頁(15) Der kleine Herr Friedemann を(6)と、以下順次番号をずらす。
従って最後の Felix Krull は(45)となる。